

近くの街で

近くの街を歩く
しばらく来ていない道
すれ違う若い人たち
モバイル見ながら

少し曇って降り出しそうな
ペDESTリアンデッキに
昔住んでた街の面影
懐かしさよみがえる

八角の民間交番
今はもうなくなって
そのさきの個別カウンターの
ラーメンをすする

新宿と横浜からも
30分そこそこの街
便利さと懐かしさが
程よいバランス

私鉄沿いの道の途中
踏切の人だかり
そこに過ぎ去る電車とともに
スツといなくなる

デパートの中間階
人もまばらで
そんな中でもたくさんの人
集まる地下売り場

花あかり

心に残る絵の中で
遠くの山はただの闇で
その向こうはまるで目のような月
こちらを見るその下
迫ってくる花あかりの
その中の顔迫ってくる

君はこれまでの
中で何ができたのか
ちゃんとやって
自分に嘘はついてないか

少しだけの光の中
藍色の空に負けないで
静寂を突き抜ける輝き
全てを忘れただけ見つめる
けむくじらの妖怪が
そうこちらに迫ってくる

そして立て肘付き
問いかけてくる
素直になって
自分に嘘はついてないか

君は生きてるのでなく
生かされている
人生の歩み歩むのでなく
歩まされている

巧言令色鮮なし仁

人はその昔から変わってない
巧言令色鮮なし仁
自分もそうだ

自分に目的があるように
近づく人にも同じように

この人ならと思い込んで
全てを打ち明ける

優しい気持ちを
たくさんもらったように
感じてしまう

人はその昔から変わってない
巧言令色鮮なし仁
自分もそうだ

気がついたら誰もいなかった
出し尽くしたパフォーマンス

あんなにたくさんの協力
得られてたはずなのに

手のひら返したように
背を向けられたように
感じてしまう

人はその昔から変わってない
巧言令色鮮なし仁
自分もそうだ

今どきの教訓

目にかけて成長して育った人はいなくなる

これから先を託すつもりが
ある日突然辞めることを聞いた
終身雇用など古い感覚
乗り換える会社 乗り物に過ぎない

社内の垣根はすでになくなって
おもねることのない時代になっている
今時のできる人に限って
押し付けの価値観に従うことはない

理不尽を押し付けて残る人はいなくなる

やる意味と意義を伝えられないまま
任せるだけでは軽蔑される
リスペクトできない人に偉そうに
言われる筋合いなどあるわけがない

多様な価値観 認めるしかなく
上下序列のない時代になっている
今どきのできる人に限って
上司の顔色だけ伺うことはない

会わなくなった

伝わっているような気がして
これまで信じていた
何も言わなくても
思っていることが

距離を保つ世の中で
連絡しないでいた
いつか会えるだろう
そうその気になれば

知らず知らずに離れてしまう
交わす言葉も気軽でなくなった

いつの日にか会わなくなった
声かけるのも怖くなってきた

一緒に飲んだあの店にも
なかなか行けなくなって
今でもあるのだろうか
なくなっていないだろうか

距離を保つ世の中で
会わないだけでなく
電話やメールさえも
今はしなくなった

知らず知らずに遠くなって
かける誘いも気軽でなくなった

いつの日にかあの頃のように
冗談さえも言えなくなってきた

知らず知らずに離れてしまう
交わす言葉も気軽でなくなった

いつの日にか会わなくなった
声かけるのも怖くなってきた

静寂の景色

静かに流れる大きな川を
横切りわたる高速
終点間近の見渡す風景
広い平野の片隅

せわしい生活のなか
賑やかなビルを抜けて
山すら見えない大地で
少しだけの休息を

地平線
水平線の
パノラマ
見渡す

途中下車した香取のまち
夕方まで遊んで
再び高速に乗って
おとなしい夜の楽しみ

今日は家族で居酒屋
川縁歩き辿り着く
いつもと違う食事
いつもと違う寝床

あかりのない
広い道路
モバイルで
照らしてゆく

地平線
水平線の
ほのかな灯り
見渡す

店の名は「カリンカ」

信州の高原で孤高の人が切り盛り
凜とした佇まいその店の名は「カリンカ」

地図を見てさがしても検索でも見つからず
もう一度この目で確かめてみたい

いつしか看板も無くなり
強い印象だけ残る

幾度かは訪れるチャンスもあったのだけれど
ピロシキやキッシュなど味わってみたかった

何も無い別荘地 広い空に遠くの山
隣の喫茶店 関係あるのかな

あれから何十年経つのか
今でもその人に会いたい

信州の高原で孤高の人が切り盛り
カリンカカリン カリンカカリン
聞こえてきそうなメロディ

いつしか看板も無くなり
強い印象だけ残る

あれから何十年経つのか
今でもその人に会いたい